

齊藤ゆかゼミナール（生涯教育学）活動報告

生涯教育学を専門とする齊藤ゆかゼミでは、お年寄りから子どもまで多世代や多文化の交流を目的とした様々な事業の企画運営をしています。その一部をご紹介します。

● 「子どもお楽しみ会」の遊びブースの企画運営

2019年11月30日（土）、老人福祉センター横浜市うらしま荘（横浜市神奈川区）にて「子どもお楽しみ会」が開催され、人間科学部の学生11名と社会教育課程の学生5名が企画運営に携わりました。このイベントは公共施設を有効活用した異世代交流ができる場所づくりを目指し、神西浦島地区、白幡地区、大口七島地区の主任児童委員の方が主催し、民生委員や保健活動推進委員、ボランティア団体、神奈川区社会福祉協議会などさまざまな方の協力により企画されました。私たちは企画立案の段階から参加し、イベントの準備をしました。当日は受付や遊びブースを担当し、多くの子どもたちとゲームなどをして遊びました。（感想は後述）さまざまな世代の人が一堂に会し、楽しい空間を創り出すことができました。

◆ 回れ紙ゴマちゃん・受付担当（齊藤ゼミ）

今回は浦島荘という老人センターで行われた「子どもお楽しみ会」に齊藤ゆかゼミ生として参加させて頂きました。まず自分たちは1つの遊びのブースと受付係を担当しました。遊びのブースとしては、紙皿にペットボトルのキャップをくっつけコマを作成して子どもたちに遊んでもらうという遊び内容でした。紙皿に子どもたちの思うがままに色々書いてもらって世界に一つだけの自分だけのコマを作って欲しかったので、ペンやクレヨン、マスキングテープ、折り紙など色々用意しました。自分が思っていたより子どもたちがコマを作ってくれたのはよかったです。なにより嬉しかったのは、子どもたち同士が作ったコマで遊んでくれていた事でした。楽しそうに遊ぶ姿を見ることが出来たのが1番の幸せであり、やりがいを感じました。受付も並行してやっていたのですが、来て下さったみんな一人ひとりに笑顔で対応して、ちゃんと受付出来たかなと思いましたが、今回ゼミで初めてプログラムのリーダーをやりました。主任児童員さんと連絡を取り続け色々決めたたりなど大変だったけれど、やっぱり最終的には

人間科学部 人間科学科
2年 中山 就太
三木 静菜
1年 小川 梨莉子

作井 由樹 今川 暉一朗 朴智婉
村松 勇祐 松尾 凌我 田崎 葵

やりがいを感じましたし、子どもたちの笑顔でやって良かったなと感じられました。後輩のみんなは、もっと今以上にたくさんの方にチャレンジして欲しいです！
（人間科学部2年 中山 就太）



受付ブースの様子

私たちはオリジナルの紙コマが作れるブースを出展しました。始まる前は楽しみな気持ちと同時に、子どもたちとうまく接することができるのか、楽しんでもらえるのか不安な気持ちもありました。いざ始めてみると、子どもたちは一生懸命にお皿に絵を描いたり、シールや折り紙を貼り付けた

りしていました。その中でも大きな声でお話をしながら作業する子、黙々と作業する子、何個も作りたがる子などいろいろな個性をそれぞれの子どもたちは持っていました。元気で素直な子が多く、「ありがとう」と子どもたちに言われたときは嬉しく、子どもたちの笑顔にとても元気をもらいました。普段、子どもたちと関わる機会は少ないため新鮮な気持ちになりました。また、子どもたちとコマ回しで対決して遊んだりして自分自身も楽しんで参加することができました。大きなハプニングもなく、たくさんの子どもたちが楽しそうに笑ってもらえたことが何よりも一番良かったです。まだまだ工夫が足りなかった部分もありましたが、今回「子どもまつり」に参加することができて、多くのことが学べました。また参加したいと思えます。

(人間科学部 2年 作井由樹)

私は子どもお楽しみ会でこまのブースと受付をしました。子どもたちとは楽しい時間を過ごすことができました。これまで私は、中学生年代の子どもたちとはたくさん関わってきましたが中学生より下の子たちとの関わりは少なかったので新しく知るものがたくさんありました。まず、私の印象では小学生はとにかく元気な子が多いイメージだったのですが、「子どもお楽しみ会」に来ていた子どもたちは元気な子・やんちゃな子もいれば、静かに作業に集中している子・遠慮しがちな子もいたので、いろんな子どもがいて驚きました。いろんな子どもがいる中で、一人一人の子どもに合っ

た対応が必要で、子どもと関わることの難しさを知ることができました。そして、子どもの発想力の豊かさに驚きました。遊び終わった後に、同じ道具を使って違う遊びを考える子もいました。親が何をするか分からないと言って、子どもから目が離せない理由が分かりました。企画・運営する側は子どもを喜ばせるような様々な準備がされてきました。今後、私たちがいろんな企画をしていく中で、真似したい・良いなと思うことがたくさんあり、とても良い経験をすることができました。素晴らしい「子どもお楽しみ会」に参加することができました。ありがとうございました。

(人間科学部 2年 今川暉一朗)

うらしま荘のイベントにどの程度の子どもたちがイベントに参加するか分からない状況であり、私たちのグループが準備したイベントが子どもたちに好まれないかもしれないという考えがあり、不安がありました。

しかし予想以上に、子どもたちは熱心に、紙皿を飾ってくれ、その姿に感動しました。年齢が若い子どもであればあるほど、考える時間が短く、さりげなく飾れ、学年が上がるほど、どのように飾ればいいのか、自分たちの感性で飾る姿に驚きました。あと紙皿を飾るだけではなく、皿の形も違う形に変えて作る姿を見て、創意力がすごいと思いました。

開催の方々も親切に迎えてくださり、子どもたちの純粋な姿、笑顔をずっと見ていて時間が過ぎ

てしまいました。とても楽しかったので参加してよかったです。

(人間科学部 2年 朴智婉)



全体で遊ぶ様子

子ども祭りに運営側として参加した率直な感想は、「楽しかった」です。子ども祭りというイベントを一から企画したわけではなく、イベントの中のブースで遊びを考えるということをしました。それは私にとって初めてのことで、わからないことだらけでした。初めは遊びを考えるだけだから簡単なことだと思っていました。しかし、考えてみると、学年、年齢関係なく楽しめること、工作系のものであったら作るだけで終わらせず、その後作ったもので遊べるようにする、子どもたちがやっている姿を親が見て楽しいか、などいろんな視点のいろんな工夫が必要でした。将来子ども関係の仕事につきたいと思っているので、今回のイベントに参加させていただいたことはとても良い

経験となりました。そして、最後に、私たちが考えた遊びを楽しいと笑って遊んでくれている子どもたちを見て、子どもの笑顔をこれからもつくりたいと思いました。この経験を活かしているようなことにつなげていけたらと思います。

(人間科学部2年 三木 静菜)

◆ 飛ばし太郎グループ

(社会教育課程の自主グループ)

今回3回目の太郎チームの遊び屋台は空気砲でした！内容は段ボールやペットボトルを空気砲にして、トイレットペーパーの芯をお化けや、モンスターに見立てそのお化けたちを倒す遊びです！また遊んでくれた子どもたちにはお土産として自分たちで作った折り紙のメダルをあげました。実際にやってみると、なかなか倒せない子どももいれば、すぐに倒せた子どももいて、子どもの年齢に応じた成長をとて感じました。しかし制作側の自分たちとしては、たくさん子どもたちの力の差を一緒に見てしまったこと、小さな子どもにも簡単に倒すことができる的の製作まで手間が回らなかったことがあげられました。4回目の太郎の遊び屋台では準備に余裕を持つことや、子どもたちの様々な特徴に目を向けることを忘れずに準備・作成をしていきたいと思えます。

当日は放課後キッズクラブの子どもたちがダン

スをしてくれました。子どもたちが一生懸命に踊っている姿は言葉では表しきれないくらいの感動がありました。また子どもたちが頑張ってる姿を見ると自分たちも「もつと頑張らなきゃ！」と感じました。日常を何も感じずに生きている生産性の無い大人たち、もつと生きる意味を持て！

この太郎シリーズは神大の2年の渡邊がずっと担当してくれていて、今後も引き続き行うことも本人は希望していますが、後輩の台頭も主任児童委員は望んでいました。必ずやらなきゃいけないというものではありませんが、子どもと関わる機会、地域と関わるができる機会というものはなかなかないと大学2年間を終える今気づきました。少しでも子どもにも興味がある人、地域と関わりたい人はぜひ一度参加してみてください。

(人間科学部2年 村松 勇祐)



子どもたちと手作り空気砲で遊ぶ様子

● 「クリスマスKIDS運動会」の企画運営

神奈川大学の近隣の神大寺地区センターにて、子どもを対象とした「クリスマスKIDS運動会」(2019年12月14日)を企画運営しました。この事業のテーマは、「元氣・勇氣・やる気」冬でも明るく仲間と一緒に運動(スポーツ)を楽しもう」としました。

具体的な目標としました。第一に、家にもちがちな冬季に、多様な運動(競技)に「元氣」にできる挑戦する「勇氣」を持てること。(運動能力の向上) 第二に、運動を通じて、「仲間」と協力する大切さや楽しさを伝えられること。(仲間意識の醸成) 第三に、「神大寺地区センター」を拠点とした事業を実施することで、子ども・大学生・地域の大人との関わりや繋がりを創出することができる。(繋がりの戦略) 第四に、ボランティアスタッフとなる大学生が「元氣」や「やる気」が、子どもたちや地域の方にもその気持ちが伝わり、地域がもつと元氣になること。(地域活性化の戦略) 第五に、事業を試行することにより、地域の実態(子どもの日頃の遊びや運動状況)を把握し、次なる事業企画を提案する機会となること(地域の実態把握)。

本学学生は企画だけでなく、広報から遊びのプログラム考案、会場設営まで多数の役割をこなしながら事業の準備をしてきました。参加者は3歳〜12歳までの約60名の子どもが集まり、学生たちと共に7つのプログラムを楽しみました。プログラムは、「みんなで集めよう!プレゼントじゃんけ



神奈川県長(高田氏)を囲んで神大生と

ん」「投げ込め！ボールたちを！」「サンタさんと大冒険！」「届けよう！クリスマスプレゼント！」「キャッチしよう！風船の雪」「トナカイひきごっこ」「サンタクロースを逃がすな！大作戦！」など。事業の終盤には、神大寺郵便局長サンタと学生トナカイが、子どもたちにお菓子のプレゼントを届け、盛会のうちに終わりました。

子ども達からは、「ありがとうサンタさん!!」「プレゼントじゃんけんとうせんキャッチが楽しかった」「ぶかちゅーチームのみんなと仲良くなれておもしろかったです」「自分たちがかってうれしかった」などの喜びの感想がありました。また、保

護者からは「お兄さん、お姉さんと触れ合う機会がなかなかないので良い機会になりました」「子どもがとても楽しそうでした」「楽しい企画をありがとうございました」「次の機会も参加したいです」などの声を頂きました。さらには、神大寺地区センターの職員からは、「沢山のお子様が楽しかったと言って帰られました。若い学生と遊ぶ機会を作っていただきありがとうございます」など、感謝の言葉も頂きました。改めて、地域における学生と子ども、地域の方々のつながりの大切さを学びました。

●参加学生たちからの感想

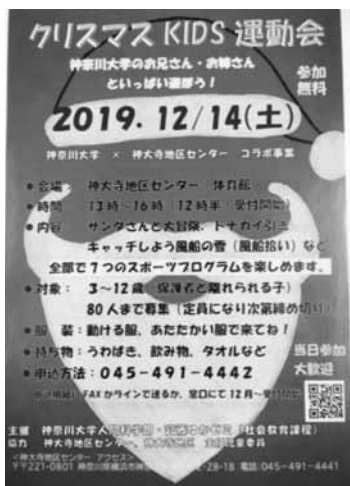
私はリーダーとしてこのクリスマスKIDS運動会を企画し、運営、実行しました。

私は主にゼミのみんなに役割を与えるような仕事をやっていました。最初は、適当に割り振っていたけど、だんだんその人の人柄にあった役割があるなど気付きました。そこに気づけたことはとても重要なことでした。そこから詰まっていた準備などが動くようになりました。また、こうした企画するのは初めてで、戸惑いがありながらの活動でしたが、先生やゼミの友達に助けられて、プログラムを実行することが出来ました。夏から準備を進めてきましたが、本番が近くなればなるほど焦りが出て、慌てて準備をするような形になってしまいました。企画を立ち上げた時から逆算して準備ができたらもっと良かったと思います。今回は全てが上手くいったわけではなく、課題も

多く残るような企画でしたが、子どもたちや親御さんたちに喜んでもらえるような企画ができたことはとても良かったです。今回のことを活かしてまた頑張ります。(人間科学部2年 松尾 凌我)

私たちにとって初めて最初から企画して行った企画だった。改めていちゃ何かを作り出すのは簡単ではないことなんだと感じた。キッズ運動会は成功したと思うし、自分のにも子どもたちが楽しそうにしていたり、時には真剣に競技をやる姿をみてとても感動したし、とてもやってよかった。中心になって企画の作成などしてくれたメンバーには感謝したい。けれど、全てが全て良かったのではなく、自分たちの班が考えた企画があまりいい方向にでず、考えが甘かったなど痛感した。自分たちの班は初めトナカイひきごっこというトナカイの着ぐるみを着た大学生を引っ張るといふ企画を提案していたけれど、トナカイの衣装を5つ揃えなければならず、予算的にも厳しかったので借り物競走という競技に変更した。まずこのことに気づくのが遅かったし、直前になって変更したのであまりしつかりとした準備が出来ていなかったと思う。競技が始まって3人で1つのお題を取ってねと子どもたちには言ったが、みんながみんなお題を取ってしまっていて困ってしまった。そりゃ大人じゃないから自分の分取りたいよねと思いが甘かったなと感じた。今回はいい面も悪い面も含めてとてもいい経験になった。

(人間科学部2年 中山 就太)



学生が作成したチラシ

実施するにあたって初めて運営側の難しさを知りました。これまでも高校の文化祭などで運営側を経験したことはありますが、今回のように50人以上の子どもたちを対象に何かをしたことはありませんでした。話し合いを重ね、頭の中でイメージはできていたものの、実際に行ってみると自由で無邪気な子どもたちの相手をしながら運営をす

初めて自分たちでいからイベントを企画してとても良い経験になりました。このイベントを通して、「視点を変える」ということを学びました。対象とした人の視点だけではなく、その対象と関わる人、イベントに関わってくれた人全体の視点を考えなければいけないと思いました。私自身あまり自分から動いたりしない性格なので、今回のイベントで何が必要かなど自ら考え動けた部分もあつたので成長できたと思います。私たち若者が中心となつて行ったことで、子どもと街と学生をつなげた気がしました。
(人間科学部2年 三木静彦)



プログラムの運営の様子

「クリスマスKIDS運動会」は、子どもたちと多く関わることができてとても楽しめました。また、様々な人々と関わることで、良い経験になりました。私の周りには、子どもはいません。そのため人見知りで隠れてしまう子や、積極的にサンタ帽を強奪する子など、色々な子がいるのだなあととても面白く感じました。競技外でも走り回

るのはとても難しく、大変さを実感しました。また、今回のイベントは自分たちだけでは絶対に成り立たないもので、地区センターの方や地域の方の協力があつてのKIDS運動会だと思えます。地域の方たちに感謝の気持ちを忘れず、今後も、このような活動に関われる機会があればぜひ参加していきたいです。
(人間科学部1年 小川梨莉子)



事業を企画した学生(地区センター館長と神大寺郵便局長を囲んで)



サンタに手紙をかく様子

る子が多くいたので、もっと思い切り走るような競技もあつた方が良かったのかなと思いました。
(人間科学部2年 田崎葵)